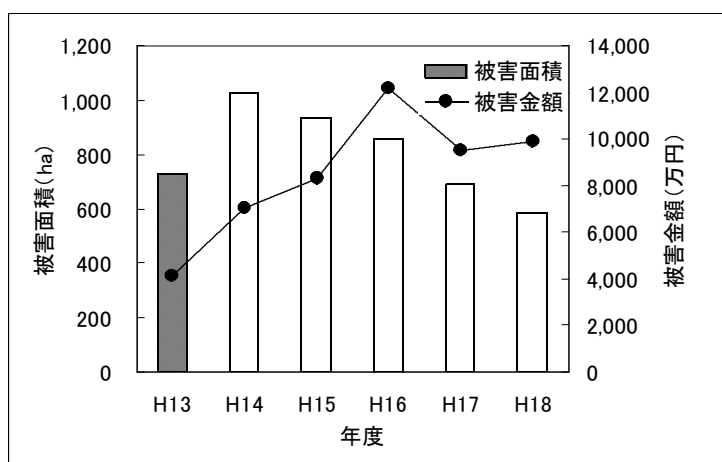


第VI章 本県で問題となっている鳥獣害

奈良県における鳥獣類による農作物被害状況を下左図に示します。これは毎年、市町村から報告されている被害状況を集計したものです。奈良県では、カラス、スズメ、ハト、ムクドリ、イノシシ、シカ、サル、キツネ、タヌキ等による被害が報告されていますが、中でもカラス、スズメ、ハト、イノシシ、シカ、サルによる被害は特に顕著です（下右表）。

これらの被害を防止するには、それぞれの生態や習性を把握しておくことが重要です。そこで、この章では、鳥獣類別にその特徴や生態、農産物被害について概説します。



物被害状況

<主な鳥獣類による被害面積>

図. 鳥獣類による農作

単位:ha

	H16	H17	H18
カラス	139	90	75
スズメ	64	67	62
ハト	71	42	35
ヒヨドリ	19	26	26
ムクドリ	13	5	6
イノシシ	277	258	198
シカ	169	101	114
サル	66	50	44
キツネ	2	2	2
タヌキ	4	1	2
ウサギ	4	4	4

1. 鳥類

1) カラス

(1) 分類 スズメ目カラス科 ハシブトガラス又はハシボソガラス

(2) 特徴 日本中に分布しているカラスは、市街地や田園地等で日常的に見られる全身黒色の鳥で、翼を広げた長さは50cm程度になります。見た目はよく似ていますが、一般的にカラスと言われているのは、ハシブトガラスとハシボソガラスの二種類で、くちばしの太さや形が異なるのが特徴です。



<ハシボソガラス>

ハシブトガラスは南方系のカラスで、都会をジャングルに見立て

て適応しているため都市部に多い傾向があります。ハシボソガラスは北方系のカラスで草原など開けた土地に適応しているため農耕地に多い傾向があります。

- (3) 生態 　他の鳥に類を見ないほど頭脳が発達し、餌の範囲も広く、適応力が非常に強く、市街地や田園地等広く生息しています。生活は春から夏の間が繁殖期と秋から冬の間の集団生活期に分けられます。繁殖期につがい形成され、繁殖のためのなわばりを持ち、この中で生活をします。巣は木の上に作られますが、電柱や鉄塔などにも作ります。卵は長径4cm、短径3cm、重量25g程度で、地色は緑青色で茶褐色の斑点があります。産卵の数は1日1個で、3個から5個を約20日抱卵します。ヒナを育てる期間は35日程度です。ヒナが巣立った後は家族単位で生活しますが、秋になると徐々に大きな群れを作り、行動距離は30kmにもなります。
- (4) 農作物被害 　良く知られた悪食性で、穀類、野菜、果物等の植物質、昆虫類、魚介類、小動物等の動物質、それに家庭から出されるゴミなど何でも食べます。そのことから、被害を及ぼす農作物の種類も多く、被害の面積や金額は、全ての鳥類の中で最も大きいです。中山間地で被害の大きい獣類と異なり、県下に広く生息域を持つことから、スイカ等の野菜類、カキやナシ等の果樹類を始め、水稻、いも類、豆類、雑穀等への被害が多く報告されています。

2) スズメ

- (1) 分類 　スズメ目ハタオリドリ科　スズメ
- (2) 特徴 　頭上は褐色で背は栗色に黒の縦斑があります。顔は白く、喉と目の周りが黒いです。体長は14cm、体重は20g程度です。両足を揃えて跳ねるように歩きます。
- (3) 生態 　民家、樹林地、農耕地等に生息し、人の生活に密着して見られます。都会部にも生息しますが、農耕地がある場所のほうが数は多いです。晩冬から初春につがいができ、3月から8月頃までに、約2回繁殖をします。卵は直径2cmぐらいで、地色は白色で茶色の斑点があります。産卵の数は1日1個で、3個から6個になったら雌雄が交代して抱卵します。抱卵期は10日程度で、ヒナは2週間ぐらいで巣立ちます。イネ科等の種子、チョウやガの成虫や幼虫、バッタ、クモ等も食べます。寿命は3年ほどと言われています。
- (4) 農作物被害 　県下全域で稲への被害が多く報告されており、籾や登熟中の

胚乳を食べます。また、豆類や稲の苗も被害を受けます。特に市街地で水田の少ない地域、早生品種の稲作地等では被害が集中し、甚大になることがあります。

3) ハト

(1) 分類

ハト目ハト科 ドバト又はキジバト

(2) 特徴

国内で一般的に見られるのはドバトとキジバトで、いずれも体長は30～35cm程度です。ドバトの体色は、白色や黒色が組み合わさり複雑な色であるのに対し、キジバトは灰褐色で、首には青と黒の斑があり、羽のうろこ模様が特徴であることから見分けることができます。

ドバトは元々野鳥ではなく、カワラバトというハトから食用等に人工的に作られた品種が逃げ出して野生化したものです。

(3) 生態

地面に落ちている種子、果実などをついばんで食べます。主として植物食ですが、昆虫やミミズ等の動物質も食べます。

繁殖は年3～4回で、産卵期は4～6月頃が中心とされていますが、市街地等エサの豊富な所では周年繁殖します。産卵数は1度に2個で、抱卵期間は15～16日程度、巣立ちまでの日数は15～20日位です。

(4) 農作物被害

県内では、大豆、小豆、エンドウ豆や野菜、稲への被害が報告されています。豆類では、収穫時期だけでなく、は種時期に地表面に落ちている豆をついばむだけでなく、土を掘って食べられたり、出芽時に子葉を食べられる被害も多く発生しています。

4) ヒヨドリ

(1) 分類

スズメ目ヒヨドリ科 ヒヨドリ

(2) 特徴

全国的に分布し、樹林地、市街地、農耕地などに生育する一般的な鳥です。全長は25～30cmで、「ピーィ、ピーィ」「ピーヨ」等と鳴きながら、波状に飛ぶのが特徴です。体色は灰色で頬が赤みを帯びています。

(3) 生態

春に林地や街路樹で営巣して繁殖すると考えられています。また、冬に渡ってくる個体がいるのですが、その数は年によって変化が激しい事が知られています。自然に存在する果樹類の豊凶などによって渡りの量が決まると考えられています。詳しいことはまだはっきりしていません。

(4) 農作物被害

県内ではハクサイやキャベツ等の野菜類やカキやミカン等の

果樹類、庭木の実等の食害が報告されています。餌が少ない時期に、大群で頻繁に侵入されると、壊滅的な被害になることもあります。

5) ムクドリ

- (1) 分類 スズメ目ムクドリ科 ムクドリ
- (2) 特徴 頭部は黒灰色、胴体部はほとんどが灰褐色で、頬部、腰部、尾羽に白斑があります。嘴と足は橙色であることから見分けることができます。また、「キュルキュル」等と鳴き、直線形に飛ぶのも特徴です。九州から北海道まで分布しますが、関東以北で多くなる傾向があります。
- (3) 生態 繁殖期は春から初夏にかけて、つがいが営巣し3～7個を産卵します。幼鳥が巣立った後から、その後晩秋まで、数万羽単位の大規模な集団となり、夏ねぐらを形成します。その集団は、冬になると分割されて数百～数千羽程度になり、落葉の時期が遅い樹林地を冬ねぐらとするようになります。このねぐらの位置は、餌場の場所によって決まると考えられています。雑食性で、昆虫、ミミズ、コムギ、モモ、カキ等を好みます。秋には庭木の実も食べます。
- (4) 農作物被害 基本的に果実を好むので、カキ、ブドウ、ナシなどを食害します。ただし、ヒヨドリと違い、ショ糖を分解することができないので、ショ糖含有量の多いミカンではほとんど被害は発生しません。街路樹などに大規模な夏ねぐらを作ることが多く、県内ではそこから生じる糞害など衛生的な被害も大きな問題となっています。

2. 獣類

1) イノシシ

- (1) 分類 偶蹄目イノシシ科 イノシシ
- (2) 特徴 体色は茶色で、木や土の色と重なり、保護色となっています。生まれて4ヶ月頃までは授乳期で、ウリ坊と呼ばれるように縞があります。体重は100kg程度にもなります。雌雄ともに上下の顎に犬歯がありますが、特に雄の下顎の犬歯が発達して目立ちます。鳴き声



<ウリ坊>

は「ブーブー」と低い声を出します。

(3) 生態

雄は交尾期である冬の数日間以外は単独で行動し、子育ては行いません。雌の多くは、その年に生まれた子どもを連れて行動しますが、春の出産期になると子別れします。母親と別れた子は、しばらくはグループを作って生活しますが、次第に雄は単独で行動していくようになります。1頭の雌は、2～8



<イノシシの親子>

頭の子を出産しますが、1才まで生き延びる子どもは半分にすぎません。ただし、生息地での食物や気候などの環境が好適であれば、生存率は高くなります。飼育下では20年前後、野生では10～15年の寿命をもちます。

(4) 農作物被害 雑食性で、被害を及ぼす農作物の種類も多く、被害の面積や金額は、全ての獣類の中で最も大きいです。奈良県でも東部、南部を中心に多くの市町村から、水稻、野菜、いも類、果樹、豆類、雑穀等への被害が報告されています。

水稻では、出穂後に水田に侵入され、穂をしごかれて食害されます。また、田でヌタウチを行い、稲を押し倒されると、収穫できない状態になり、糞に獣臭も残ります。出穂期以外でも、水田に侵入され畦が掘り起されて破壊されることもあります。

野菜では、ナス、大根、カボチャ、ニンジン、白菜、キャベツなど様々な作物が食害されています。サツマイモ、ジャガイモ、山芋等のいも類を好み食害しますが、里芋は食害よりも掘り起こしによる被害が多いです。また、ミミズ目当てに土を掘り返すことによって、茶や花木、椎茸への被害を及ぼすこともあります。

栗、ミカン、柿、梨、桃などの果実では、下に落ちた実を拾って食べたり、後肢で立って、木に付いている果実をとられることもあります。この時に、枝を折られたり、根本を掘り返され木が枯れると、単年だけの被害にとどまらなくなります。

2) シカ

(1) 分類

偶蹄目シカ科 ニホンジカ

(2) 特徴

夏毛は茶褐色の地色に白斑がありますが、冬毛は、オスは濃い茶色、メスは灰褐色で、白斑はほとんど消えます。オスは年齢に伴い大きくなる角を持ちますが、これは0歳時にはなく1歳以降に形成されます。角は毎年春に落ち、



その後袋角が生え、秋頃には骨質化して完成します。成体の体重は80～100kg、肩高は80～120cm程度になります。

(3) 生態

発情期の秋以外は雌雄が別々に群れをつくり、発情期の秋にのみオスはなわばりを持ちハーレムを形成します。群れ生活で土地を排他的に利用しないため、生息密度は環境によっては80頭/km²と極めて高くなることがあります。シカは昼夜を問わず活動し、昼間は主に森林の中におり、農耕地や草地へは夜間に出ることが多いです。交尾は秋（10～11月）で、妊娠期間は約220日で、5～6月に普通1頭を生みます。寿命は最長でオス10～12年、メス15～20年とありますが、平成17年1月の県教委実態調査で、奈良公園のシカの平均寿命は4～5年と公表されています。

(4) 農作物被害

胃内容や糞の分析結果からは、1000種類以上と極めて多数の植物が報告されています。奈良県でも、近隣に森林のある中山間地域で、稲、野菜、豆類、いも類、雑穀、果樹等多くの農作物の被害が報告されています。被害の大きい水稻では、田植え後から稲刈りまでの全ての段階で水田に侵入し、踏み荒らしたり、葉や穂を食害します。シカは個体や群れの縄張りを形成しないため、食料条件の良い農耕地や草地では、比較的大きな群れになるとともに、同じ田畑に繰り返し侵入し、被害が甚大になることもあります。

3) サル

(1) 分類

霊長目オナガザル科 ニホンザル

(2) 特徴

体毛は茶褐色で、成体（オス）の頭胴長は約60cm、尾長は約10cm、体重は10～20kgになります。サルは胴体と四肢の内側は白っぽく、顔と尻には毛が少なく、成体になると赤くなります。



4才くらいまでは、年ごとに体が大きくなります。オスの成体はメスより犬歯が顕著に長く、睾丸が目立つことから容易に見分けられます。

(3) 生態

ニホンザルの社会は、両性からなる群れとオスのハナレザルからなります。オスは生後4～5年で生まれた群れを離れ、他の群れに移入したり、ハナレザルとして過ごします。メスは群れで一生を過ごすので、群れ内のメスは全て血縁関係にあります。群れの大きさは一般的に10～20頭で、個体数が多くなると群れが分かれるようになります。群れは採食場や泊まり場、休息場を設け、移動しながら生息しています。この行動域は、年や季節によって変化しています。食物は果実や野菜等の植物質を主としますが、キノコや虫、トカゲ等の動物質も食べる雑食性です。

交尾期は秋から冬期で、妊娠期間は180日、5～6月に出産します。野生群での初産年齢は6～8才で、2～3年に1回出産しますが、栄養条件が良いとこの間隔は短縮します。1回の出産頭数は普通1頭です。

(4) 農作物被害

本来、森林に生息するサルが農作物に被害を及ぼしている地域は、県南部・東部の中山間地域です。作物別にはスイカ、トウモロコシ、カボチャ等の野菜が被害面積の約半分を占めますが、いも類、豆類（大豆、エンドウ）、果樹（柿、桃、梨）、稲、シイタケ、雑穀も報告されています。

スイカは収穫期に皮を残して中身を食べます。トウモロコシは人と同じように、芯を残して実をかじります。豆類は完熟前のサヤを噛み、中身を食べます。また、稲刈り後の水田に侵入し、落ち穂を拾って食べたり、畦に生えたレンゲなどの花も食べます。

これらは実質的な被害はありませんが、サルの栄養条件を良くするとともに、農村への侵入機会を増やすことから、農作物への被害を助長することにつながります。近年では、農村への侵入に慣れたサルが、人家に侵入し果物を盗むような事件も生じています。



<荒らされたタマネギ畑>

4) キツネ

(1) 分類 食肉目イヌ科 ホンドキツネ

(2) 特徴 頭胴長は50～75cm、尾長は25～40cm、体重6～9kg程度です。小型の犬に似ていますが、体は細く四肢が短いです。また、尾は太く、先端は白色か黒色をしています。耳は幅が広く先がと



がり、背面と四肢の先は黒色です。足跡は同じ大きさのイヌのものよりも細長く、一直線上に並ぶ特徴があります。体色は生息地や個体、季節などによってさまざまですが茶～赤褐色です。

(3) 生態 母系家族で母と子、ヘルパー（若いメス）からなります。交尾期は12月～2月、妊娠期間は50日前後で、数頭の子を産みます。オスは生後1ヶ月まで育児のために生活をともにしますが、それ以後はほとんど生活をともにしません。9月頃になると、集団は表面上分散した様な形になりますが、なわばりの範囲内で活動しているといわれています。生後7～8ヶ月に達したオスはなわばりを出ていきますが、メスの多くはなわばり内に残り、翌年の繁殖期にはヘルパーとして再び集団に参加するようになります。

メスは1歳で性成熟しますが、出産するのは2～3歳くらいからです。昼間は林の中に潜み、夜間になるとなわばりの内、開けたところへ出てきて摂食します。非常に警戒心が強いことから人目には付きにくいです。

(4) 農作物被害 食性は肉食が主ですが、果実や野菜も食べます。奈良県では、十津川村からスイカやトウモロコシへの被害が報告されています。

5) タヌキ

(1) 分類 食肉目イヌ科 タヌキ

(2) 特徴 頭胴長50～60cm、尾長15cm、体重4～8kgで小型の犬に似ています。体色は灰褐色で、足と目の周りは黒色です。タヌキの足跡は、長さ3.5cm程度、歩幅30～40cmで、前肢と後肢ともに4本の指の跡



がつき、それらの先端には爪の跡が残るのが特徴です。顔は前か

ら見ると丸く見えますが、横から見ると細長で小さいです。アナグマと似ており混同されることもありますが、アナグマはイタチ科でタヌキより足が太く、鼻はブタに似ています。

- (3) 生態 低山地や草原に生息するが、人家近くで目にすることもあります。岩穴や木の根元に穴を掘って巣を作ります。雑食性で、ミミズやネズミ、カエル、昆虫、魚、ドングリ、柿、ブドウなど幅広く食べます。夜に、人家の庭先に現れてゴミをあさることもあります。

3~4月に交尾し、約60日間の妊娠期間を経た後、初夏に5頭ほどの子を産みます。育児は雌雄ともに行います。子は親と同じくらいの大きさになる10月頃になると親と離れ、次第に子同士も離れて行動するようになります。つがいのつながりは秋以降に弱くなるものの、1年中ほぼ一緒に行動し、翌春も同じつがいで交尾期を迎えます。

なわばりは持ちませんが、行動域には休息場所や採食場所となる所が分かります。また、決まった場所に「ため糞」をする習性があり、一頭の行動域にたいてい数ヶ所あります。堆積すると半径50cm、高さ15cm程度にもなります。寿命は平均3~5年ですが、10年近く生きるものもいます。

- (4) 農作物被害 木に登り果実を食害することもあります。奈良県ではかぼちゃ等野菜への被害が報告されています。

6) ウサギ

- (1) 分類 ウサギ目ウサギ科 ニホンノウサギ

- (2) 特徴 体色は茶褐色で、東北地方や日本海側の積雪地帯の個体は冬季に白変しますが、奈良県の個体は年間を通じてほぼ同色です。頭胴長は40~50cm程度で、体重は約2.5kgになります。後肢が前肢に比べ著しく長いです。

- (3) 生態 ペットのウサギとは異なり、巣穴を掘らず、地面のくぼみを利用して枯葉を敷いた簡単な産床で出産します。3~4月、6~8月に出産、出産回数は年3~5回、出産数は1~4頭で、妊娠期間は40~50日程度です。生後1週間で哺乳に加え、採食を始め、40~50日で独立します。日中は雑木林などに潜み、夜に活動します。

- (4) 農作物被害 キャベツ、大根、エンドウ、大豆、ソバ、麦類、リンゴ、桃、キンカン、タケノコ、スギやヒノキの幼齢林など、多くの植物質を食害します。滋賀県や京都府では、生息地に生育する植物種の

半数以上を摂食すると報告されています。奈良県では、ジャガイモやサツマイモ、野菜への被害が報告されています。体が小さく、主に夜に活動することから、人目に付きにくく、ノウサギによる農作物被害かどうかを判断することは難しいですが、生息地では、褐色または黒色の偏球形の糞が数十個程度まとまって落ちているのが特徴です。

3. その他の獣類

1) カモシカ

(1) 分類 偶蹄目ウシ科 ニホンカモシカ

(2) 特徴 成体は頭胴長約 130cm、体高約75cm、体重30~40kgになります。体色は個体差がありますが、一般的には濃褐色です。雄雌共に12~15cmくらいの1尖角をもっていますが、雄の角は比較的長く先が鋭く、雌の角は太目です。角はシカのように落ちることは無く、一生にわたって生長を続けます。ニホンカモシカは国の天然記念物に指定されています。



(3) 生態 年間を通じて雌雄共になわばりを作り単独生活をします。同性間では行動圏がほとんど重複しませんが、特定の雌雄間では大きく重複します。発情期にはオスとメスが、出産期には母親と子がそれぞれ共に行動します。なわばりを持ち、土地を排他的、独占的に利用するため、シカほど生息密度は高くなり、10頭/km²を超えることはほとんどありません。交尾期は10~11月、妊娠期間は約215日で、5~6月に1頭を産みます。平均寿命は5年前後で、最長寿命は雌雄ともに20年を超えます。

(4) 農作物被害 シカ同様、多くの木本・草本類を摂食対象としますが、樹皮採食はほとんど報告されていません。奈良県では、吉野でヒノキ等造林木の苗木の食害が報告されています。

食害痕はシカと似ており、どちらによる害か判断が難しいです。シカと異なり、カモシカはなわばりを持ち、同じ場所に繰り返し糞をするため、糞溜りがあるのが特徴ですので、生息域を知るうえで役に立つでしょう。

2) モグラ

(1) 分類 モグラ目モグラ科 モグラ

(2) 特徴 国内には数種のモグラが生息していますが、県内では大半がコウベモグラの生息域に属します。コウベモグラは、中部地方以西の本州と四国に分布します。頭胴長は11cmで、前肢はシャベル状で5本の爪があります。体毛は暗褐色から黒褐色です。

(3) 生態 前肢で地中深さ30cmから1mにトンネルを掘り、この中で生活しています。トンネルには本道と測道があります。本道は巣から採食場へ行く通路で、頻繁に使われるため、その内壁はよく固められて滑らかとなっています。また、足で踏みつぶしても、数日以内にトンネルが復元されていたら本道であると考えられます。

交尾期は3~4月、出産期は4~6月頃で、2~6頭を産みます。生後約1ヶ月で巣穴を抜け出し、翌春には繁殖します。食物はミミズやコガネムシの幼虫、クモ、ムカデ、カエル、カタツムリ等の動物質がほとんどです。

(4) 農作物被害 肉食性であるため、直接農作物を食べることはありません。しかし、採餌のためにトンネルを掘ることによって、野菜の苗を倒したり、根を切ってしおれさせたりするなどの害を及ぼします。春から夏にかけては、地上近くで活動するので、特に害を受けやすくなります。

(5) 対策 モグラ対策については、近畿中国四国農業研究センターの井上研究員から、情報が寄せられていますので、章末でご紹介します。

3) アライグマ

(1) 分類 食肉目アライグマ科 アライグマ

(2) 特徴 頭胴長は50~60cm、尾長は20~40cmで、体重は3~8kgになります。体色は灰色~赤褐色で、尾に5~7本の縞模様が見え、目の周りはパンダのように黒くなっています。外見は愛らしいものの、成獣になると気性が荒く攻撃的になります。



(3) 生態 元々、北米に生息していたものがペットとして日本に輸入され、飼えなくなって放逐されたものが野生化した外来種です。夜行性で、水辺を好みますが、森林・湿地帯から都市部まで適応して生

息する能力を持っています。行動範囲は40～100haと広く、餌のあるところを拠点として樹のムロや土手の穴、住宅や寺院の屋根裏などに住処を8カ所ほど作って行き来しています。交尾期は1～2月で、妊娠期間およそ60日で、春に3～6頭を出産します。本来は川の魚貝類、ザリガニ、カエル、昆虫、幼鳥などを捕食しますが、果実や野菜、加工食品なども食べる雑食性です。捕獲餌としては、揚げパンやコーン菓子が使われますが、他の小型獣の誤捕獲も多くあります。寿命は野生で5年程度といわれています。

(4) 農作物被害 県内においても平成15年頃から葛城金剛山系を中心に農作物被害（スイカ、トウモロコシ、ブドウ、イチゴなど）が増え、現在では県下全域に広がっています。天敵がない現状では繁殖率が高く、競合するタヌキやイタチ、ハクビシン等よりも大きく優勢となっています。

(5) 対策 特定外来生物に指定されていて、飼育、移動、放逐が禁止されています。捕獲に際しては、最寄りの市町村役場に相談して適正に行う必要があります。

圃場を守る侵入防止柵には、電牧線の3段張り（地上10、20、30cm）が有効ですが、雑草が伸びて電牧線に触れると漏電するので草抑えシート（電気の通るもの）を電牧線の下に設置しておく管理しやすくなります。アライグマやハクビシンがネットを登る習性を利用した「白落君」（埼玉県農業総合センター古谷氏開発：防風ネット＋電牧線）やそれを改良したトタン＋電牧線など、効果の高い防護柵も開発されています。

参考文献

モグラ被害はこう防ぐ！

近畿中国四国農業研究センター
鳥獣害研究チーム長 井上雅央

1. 被害と起こりやすい誤認

モグラは完全な肉食動物で、餌はミミズ、ネキリムシ類、セミやコガネムシの幼虫などに限られ、雑食性のネズミ類（齧歯類）とは分類学的にもまったく異なる。現場ではモグラが「ダイコン、ニンジン、サツマイモ等の根菜類やイモ類、アスパラガスの地下茎を齧る」と思いこんでいる人も多いが、これらは、ネズミや昆虫類の加害であってモグラの被害ではない。モグラによる被害は、土中にいわゆるモグラトンネルを掘り進むことに起因する間接被害である。それらは

- 1) 果樹の根部周辺に空間ができることに起因する発根阻害と活着・生育不良
- 2) 果菜や葉菜類の幼苗下に空間ができることに起因する根部の過乾燥枯死

- 3) トンネルが錯綜すること起因するネズミや昆虫類の活動助長
- 4) トンネルが流水路となること起因する水田の漏水や畦の崩壊などである。

2. 対策上の誤解と被害助長要因

モグラは土中で活動するため、種々の対策の効果が確認困難なため、まったく効果のない対策が現場では見られる。

1) 震動、音、光等による撃退機器類

震動や音には慣れるため、地中パイプなどを通じて土中に伝える金属パイプなどの打撃音、風車や電子音などを発生する撃退器機などは、いかに強度や音量を増したり、ランダムな作動を工夫してもまったく効果はない。しかしながら、いかにも効果がありそうな文句で風車や撃退器が販売されており注意が必要である。これらの商品の多くはいわゆる「本道」に設置するように、という注意書きがつけられているが、本道に設置した試験の結果、まったく効果がないことが実証されている。また、フラッシュ光等はモグラが明かりを感知しないため、設置する意味はない。

2) モグラ忌避剤

正規の農薬登録のある忌避剤、例えばネマモール粒剤30等を使用基準に従って使用した場合等を除き、モグラの忌避効果をうたった散布剤、散粒、散粉剤を販売、使用することは効果以前に農薬取締法違反である。海洋生物の粉碎物、薬草残渣など、すべて効果はまったくないのでこれも注意が必要である。

3) 対処時期

現場でのモグラ対策は、多くの方が被害を受けてから開始する。しかし、一旦作付けが終了した圃場では効果的な対策をとりにくく、このことが被害を助長してしまう。モグラ対策はあくまで以下に述べるような予防がポイントである。

3. 予防的な対処法

被害が発生した後では十分な対策がとりにくく、果樹や果菜類では回復に時間がかかるため、被害発生前に対処することが大切である。

1) 果樹苗の植え付け時

植え穴に腐葉土などをいれず、しっかりと踏み固めて根と土の間隙を無くす。踏み固めてへこんだ部分の外側に盛り土をして十分なウォータースペースをとり、盛り土の上部に敷き藁や敷き草をする。こうすることでミミズは盛り土の敷きもの下に移動するため、モグラの活動域が盛り土に集中し、苗の根部周辺はトンネルが生じない。

2) 果菜類、葉菜類植え付け時

ポット苗を植え付けた場合、有機物に富む鉢土部分にミミズや昆虫類の幼虫が

寄って来るため、モグラの活動も幼苗直下に集中する。したがって、後に述べる方法でモグラをすべて捕獲した上で耕耘、畝たてを行い、素早く活着させて十分な根を張らせることが最も重要である。

なお、最近実用化されたキャベツ、ハクサイ、レタス、ブロッコリー等のスーパーセル苗は有機物に富む鉢土がほとんど皆無であるため、モグラを誘引するミミズ等が苗付近に集合しにくく、モグラ被害も受けにくいと思われる。

3) 水田の漏水防止

畦部分からの漏水よりもむしろ、稲刈り後、水田内部の不耕起層にモグラが侵入し、耕起層から表土にいわゆるモグラ塚を作るケースが危険である。田植え準備時の耕耘によっても深い不耕起層のトンネルが破壊されずに残り、耕耘によってモグラ塚直下の耕起層に開口すると、湛水と同時に漏水が始まり、開口部やトンネルが代掻きによっても埋まり切らない場合、徐々に水流が強まることが多い。したがって、水田内で秋～冬期にモグラ塚が出来た場合は耕耘前にスコップ等でモグラ塚をトンネルの開口するところまで掘り、不耕起層のトンネルを露出させた上で踏み固めた後に耕耘する。

4. 上手な捕獲方法とその後の管理

圃場を歩いてみて、トンネルの多い所を探し、一辺が50～60センチ以上、厚さ1センチくらいの板きれ（古いコンクリートパネルなど）を数メートル間隔で10枚程度板を置く。板を置く部分は鍬などできれいに整地し、地面と板の間にできるだけ隙間を作らないよう注意する。翌日、板の下にトンネルが復活している場合、そのトンネルを再度埋め戻して整地し再び板を置く。3日連続で復活したトンネルに筒型の捕獲器をセットすると高い確率で捕獲することが出来る。板の下に複数のトンネルが出来る場合はトンネルを川砂で埋め戻すと、前日できたトンネルでも復活しない部分と復活できる部分が識別できるため、より捕獲効率を高めることができる。捕獲器は直径の細い方が捕獲効率がよく、トンネルにそのまま収まる程度の捕獲器がよい。

板を使うことの利点は捕獲したのに翌日もトンネルが出来ればその圃場には別の個体がまだ生息していることが、またすべての板でトンネルが復活しない場合は、ほぼモグラが皆無となったことを知ることが出来る点である。

果樹園のように、板を継続して置き続けることができる場合は、そのままにして置くと新たな個体の侵入があった場合にも容易に知ることができる。

一方、野菜や水田など、作付け後も板を置くことが困難な場合は、捕獲を終えた後、ネマモール粒剤30をモグラに対する使用基準に従って圃場周辺処理（周辺に溝を掘り、1mあたり100グラム施用、被覆鎮圧）しておく、新たな個体の侵入を1～2ヶ月阻止できる。